

寶幢寺 御同宿中

右年號不詳といへども、利常卿の時代なるべし。又金澤町會所留記に載せたる町奉行詮議書には如左あり。

淺野川橋先年懸直り候時分、渡初之様子相尋候處、森本町寶金鍛冶九郎兵衛と申者相勸申由に御座候。九郎兵衛儀は病死仕、妻女子共罷有申候。

一、右渡初之様子、森本町肝煎助左衛門方に留書有之、別紙に書付申候。

一、右爲御祝儀銀子十枚、外爲入用銀子百二拾目被下候。然共被下銀に而不足仕、致迷惑候故、森本町之者共寄合、合力など仕様に覺申由申候。

一、淺野川橋に渡初有之、才川橋には渡初無之様子、吟味仕候へ共、子細存知候者無御座候。以上。

十月五日

和田 小右衛門

江守 平左衛門

右は元祿元年也。

按ずるに、葛巻昌興自記に、元祿元年十月七日淺野川橋落成之旨、橋架奉行高田久兵衛・近藤三郎左衛門言上。今日

達御覽、此橋之事渡初と云儀有之由に候へ共、其例不慥に

付、今度無其儀、此旨老中より言上也。とあり。されば此の時より止みたりけん。おもふに菅家見聞集に、寛文元年

五月朔日犀川大橋成就渡り初とあり。そのかみ犀川橋には渡初無之といふもいかゞ。寛文元年の架替へには渡初の規式ありたりしと聞ゆ。往昔は橋架替へのみならず、道路の付替などにも、渡初とて其の規式あり。佐那武社務所留記に、元和年中宮腰道付替る時、那奉行瀧與右衛門差圖に

て、白山神主有安と云者先道す。渡初は宮腰唐仁屋七右衛門親子十二人勤之。とあり。淺野川橋先年架替への時、森本町寶金鍛冶九郎兵衛渡初相勸、妻子今以罷在とあるも、

寛文の頃ならん。右寶金鍛冶九郎兵衛も、唐仁や七右衛門と同じく、親子繁昌して數人打揃ひ居たりしゆゑ、推舉せられしものなるべし。

○淺野川
元祿十五年土屋直心の撰述せる金城隆盛私記に云ふ。金城東淺川温水。其流入湖水。汎々於大野溲。西犀川之菊水。滔々宮腰大洋。東西二川本源雖相隔。末流落合西海云々。ま

河南・河北の二郡となりしを、亂世の頃河南郡は石川郡へ合併し、今之を中石川と呼べり。然れば淺野川は、往古より加賀郡の中央を流るゝ河水なるを、石川郡の澤田川となすは全く附合妄誕の説なる事論なし。彼の澤田川は、風土記に椋部郷の下條に載せられたれば、今倉部村の地邊なる手取川の分水なるべし。淺野川の名は、白山比咩神社に傳來せる三宮古記正和元年の次條に、水引神人沙汰進分事、大田より南淺野川。とありて、後醍醐天皇御世以前より淺野川と呼べり。淺野村山王社記に、淺野川は當社宮川の由傳承すと云ふ事も載せたり。淺野川の名は是より出でたるにやあらん。此の河は犀川と引きかへ、水勢弱くして、年々下流の埋れる事甚し。故に昔より水難多しといへども、又通船の便を得たり。三壺記に、元和六年に宮腰大野よりの馬足の便りとして、淺野川下安江と云ふ所まで堀川を通し、船の通ひをなし、堀川町を立て、傾城を置きたるよし見ゆ、今淺野川の川下を堀川町と稱するも、是より起れりと云ふ。

○淺野川産魚

た大澤君山の新架犀橋記に云ふ。犀水南出。淺水北流。帶礎城基。寶金城湯池也。淺水之源也。犀川谷之北境日尾山水。其他湯涌澗・横谷・内尾・菱池・白見・五箇・準尾之澗水會同。爲淺野川。瀦黑津湖。入大野海。有大小二橋。達大路矣。と。按ずるに、淺野川の水源水脈の巨細は、土屋義休の三川記。大路水經、石黒信由の増補大路水經等に記載せり。富田景周の金城三河考に、石川郡の風土記に、澤田河出・鮎鮪等。有綠苔獻膳夫。又曰。澤松寺云々。とある澤田河・澤松寺今共に寥乎として傳聞する事なしといへども、澤田河は便ち淺野河なるべし。澤松寺は今の松寺村その遺名の略なる歟。金澤の名義も亦緣りて起る處、此の河名に本づくに似たりといへり。平次按ずるに、今此の淺野川をば石川・河北兩郡の郡界とし、河北の郡名は此の河の以北なるを以て名付けたるよし三州志等に記載せしは、印本の和名抄に據りたる説なり。古寫本の和名抄に載せたる郷名等を以て考ふるに、上古は犀川を以て石川・加賀二郡の經界とせし事著明なり。然るを中古加賀郡をば二郡とし、淺野川の以南を加賀南郡とし、以北をば加賀北郡とせしが、後に略稱して